海外同胞の引揚げ輸送と艦艇の引渡し

北九州市小倉北区　　木下　巌

太平洋戦争の負け戦がつづく昭和１９年、私は福岡県南の小さな田舎町の中学生だった。中等学校男女生徒は殆ど毎日、学徒動員にかりだされていた。私もその１人であった。

９月下旬、動員から帰宅して１通の封書を受取った。「昭和１９年１０月１０日、佐世保第二海兵団に入団せよ」と。私はびっくり仰天するばかりであった。

「私は水兵を志願した覚えはありません」といって拒否できない怖い時代だった。かくして、私は心ならずも水兵になったのである。１５才７ヶ月の少年であった。

１０月１０日、佐世保第二海兵団入団。

２０年１月、新兵教育終了、航海学校入校。

６月卒業、佐世保海兵団に転勤。長崎三菱造船所で艤装中の第２０４号海防艦乗組み。

７月１１日、日本海軍最後の完成艦として竣工。出撃。

８月１５日、舞鶴軍港で終戦。下旬、復員。

９月、復学。

この１０ヶ月に体験したことを簡単に列記。

終戦まで最下級兵だった私は、３００日間、毎日制裁を受けた。相当ひどい制裁を受けた者を４名見た。障害が残っていなければよいが、と今でも思っている。

２０４号艤装員のとき知り合い、大変お世話になった造船所勤務の二人姉妹が原爆の犠牲になろうとは夢想だにしなかった。生死不明、現在生存ならば７０才前と思う。その人の名は、「ハラカワトミコ・スヤコ」。

２０４号は訓練地、能登半島七尾湾に向け航行中、響灘で敵潜水艦と遭遇？、初めて戦闘配置につく。敵潜捕促できず。

山口県油谷町川尻岬沖で、機関室で大事故発生、当直者多数熱傷、１名奇跡的に無傷で助かる。下級兵ほどきつい仕事をさせられる。そのため事故発生場所にいなかった。

仙崎港へ緊急入港、下級兵に真相は知らされなかったが、仙崎町の寺で葬儀があった噂が耳に入ったので死者が出たものと思われる。応急修理のため３日間停泊。猛訓練と制裁は連日つづく、主計科同年兵逃亡するも３日目に憲兵隊に自首。

７月末、舞鶴軍港内で米軍機動部隊艦載機の猛襲をうける。乗組員３名、１３㎜機銃弾により負傷、２名病院より帰艦せず。１名みぞうちを火傷。（機銃弾がかすっただけ）

８月初旬、補充兵逃亡自殺未遂、重傷。

８月１５日、終戦。

「原川」姉妹は現在でも気がかりである。運、不運は紙一重であることをつくづく思い知らされた。下級機関兵の生還、３日目に自首した逃亡兵。弾丸がみぞうちをかすった機銃員は幸

運者であり不運者は、多数の当直機関兵。２名の機銃員、終戦直前の自殺未遂者。そして私は自分を強運者だと思っている。

横須賀の航海学校を出て、佐世保に転勤したら横須賀が空襲を受け航海学校も被害があった。長崎に転勤したら、佐世保がやられ海兵団も被害を受けた。長崎を出撃したら、あのいまわしい原爆で長崎が廃墟と化した。終戦が半年先だったら、私はどこかの海で鮫の餌食になっていたかもわからない。

昭和２１年４月２日、佐世保港に停泊の特別輸送艦「生野」に乗艦。この「生野」は、上海へ航海する任務をおびていた。私は３回目から７回まで５航海に従事した。その後、戦勝四カ国の、一国、ソ連へ旧海軍艦艇を引渡しに行った。

私にとっては初回である３回目の模様を紹介するが、毎日殆ど同じ状況で行動し、引揚げ者も毎回同じ状態であった。

春台風一過の４月初旬、「生野」は上海に向け出港。玄界灘、東シナ海は台風の余波か、凄い時化である。艦は木の葉のように３０数時間ゆれにゆれた。そのうちゆれも治まり、大陸がかすかに望まれた。しばらくして真っ青だった海面が茶褐色に変わった。揚子江に入ったのである。圧倒的な水量がこちらに向かって滔々と立ち向かって来る様である。ただただそのスケールの大きさに驚嘆するばかりであった。

やがて艦は支流の黄哺江へと針路を変えた。そして目的地の呉淞（ウースン）飯田桟橋に横付けした。桟橋前の広場には疲労困憊した陸軍兵士が集合している。どの顔も喜びで一ぱいの表情をしている。乗艦が始まった。艦上はごった返した。そして間もなく出港した。陸兵達の顔が初めて安堵の表情に変わった。１人残らず上甲板に出て、大陸に向かい合い万感の思いで涙を流している。やがて大陸は春霞の中に消えていった。

艦上には方々に集団ができている。乗組員非番者は陸兵の応対をする。彼らが一番知りたいのは郷里のこと、日本の政治経済、衣食住、被害状況等である。

日が暮れ夜食がすんでも陸兵達は起きている。どの顔も飯田桟橋から出港までの不安感、出港後の安堵感、そして今度は帰国後の生活に対する危機感に満ちていた。

疲労でぐったり眠る者、一睡もしない者、様々な陸兵を乗せた艦は浮遊機雷に全神経を集中しながら、一路日本を目指して夜の海を走っている。無事な航海を祈るのみである。

五島列島が見えだすと船酔いもなんのその、続々と上甲板に陸兵達が出てきた。どの顔もどの顔も喜びと懐かしさで一ぱいの笑顔である。話す言葉にも活気が溢れている。

検疫後上陸を開始する。殆どの陸兵は感涙にむせびながら、我々の手を堅く握り「ありがとうございました」を、くり返しくり返し挙手の礼をして上陸して行った。陸上では歓声が上がり出迎えの肉親などと抱き合い、体一ぱいに喜びを表している姿に我々は感動した。

飯田桟橋で乗艦し、佐世保で故国の土を踏むまでの情景は毎回同じで、その都度感動したことをいまだに忘れることができない。「生野」は４２８３名の陸軍兵士を中国から帰還させた。

６月中旬、艦の大手入れのため岡山県玉野市、三井造船所へ。８月中旬整備を終えサイゴンへ向け出港したが中止となり、横須賀市長浦港へ回航することになった。

長浦港こそ日本海軍『終焉』の港である。

戦後各方面の引揚げや、機雷掃海に従事した艦艇が続々と集結し特別保管艦となった。戦勝国に賠償として引渡すための整備に入る。４群に編成、一つの群に約３０隻、戦勝４ヵ国の代表が抽籤し艦艇の行き先が決まり、「生野」はナホトカでソ連軍に引渡すことになった。

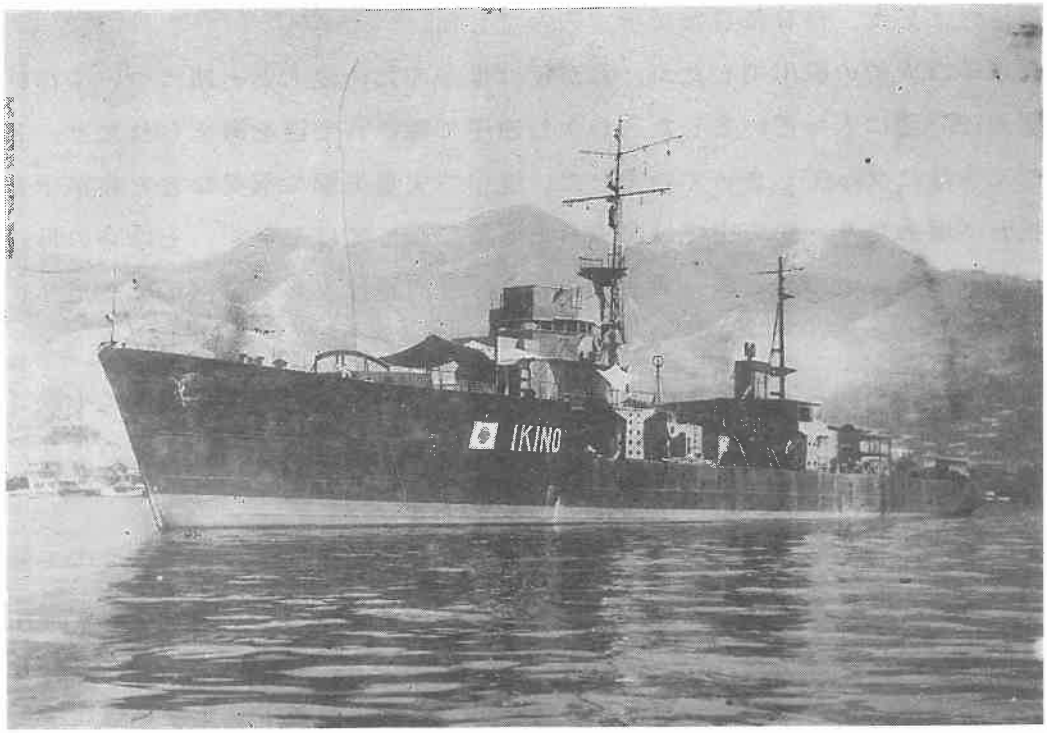
７月３０日、ソ連海軍兵と一緒に約５時間日本海を航海しながら、各部署ごとに引継ぎをした。航海を終え桟橋に横付け、左舷右舷に両国海兵が整列。マストから日本国旗降下、かわってソ連国旗掲揚。この間両国国歌吹奏。挙手の礼をもって引渡しが終了した。

我々の胸中には熱いものがこみあげてきた。

８月２８日、「生野」の僚艦「神津（こうづ）」を引渡し、海軍とかかわりあった約３年間に終止符を打った。

我が人生でプラスになったかマイナスになったかは別として、貴重な体験をしたことは事実である。懐かしくもあり恨めしくもある。

決して戦争はあってはならないが、現実として過去に軍隊が存在し戦争をしたのも事実である。体験したとはいえ終戦末期の１年たらず、ほんのほんの隅っこをかじっただけの私である。

復学半年後、海外同胞を祖国日本に帰還させるための意義ある輸送業務、そしてソ連へ賠償艦艇を引渡しに行った。

この国家的事業に一少年が参加できたことを誇りに思っている。